

2012年8月 NO.6

自主防災の基本

防災だより

- 【自助】: 自らの【命・家族】は、自ら守る
- 【共助】: 自主防災はB自治会が防災隊
- 【近助】: 防災は【近所の助け合い】が使命

発行者 B茅ヶ崎自治会・「これからの自治会活動」検討プロジェクト

関東大震災 市民の記憶

関東大震災

1923(大正12年)9月1日 11時58分 相模湾北部を震源とするマグニチュード7.9の大地震が発生した。10万人以上の死者がでた。

どんな巨大な状況だったか、を知る。

私たちが住んでいるB茅ヶ崎は、その時は開発前の山林でした。人口密度、建物の堅牢さ、土地や道路の状況も違ってなんら参考にならない。

しかし、地震をどのように感じたか、どのような建物、鉄道、道路の被害、土地の隆起、陥没、割れ、河川の変化、津波の状況などから地震の巨大さを想像できる。

そこから、防災を考える

「自助」; 自分の命は自ら守るために

この時を体験した、堤に住んでいた住民の声を拾ってみた。

茅ヶ崎市史編集委員会編 「茅ヶ崎市史ブックレット⑭」
ちがさきの「関東大震災 市民の記憶」から小出地区を中心にピックアップしました。

小出地区の当時の状況

小出地区は、当時、堤・下寺尾・行谷・芹沢の4字(あざ)で構成されている(小出村は現在の藤沢市遠藤を含んでいた)。小出地区は合わせて300戸、堤は上と下で120戸。

世帯の多くが畑作や稲作、養蚕を中心とする農家。農家の家は田の字構造で太い大黒柱で

支えられていた。柱は基礎に固定されず玉石に乗った構造であった。このためかなりの被害が出た。

今のB茅ヶ崎の土地は起伏のある山林であった。

関東大震災発生時の状況

地盤

●地割れに沿って段差ができたと言っている人がいるが大きな地形の変化はみられない。液状化の話はなかった。

●地震の約一時間後のことであったが、宅地入口の門柱の前を数ミリ幅の亀裂が東西方向に走っている状態が確認できた。

●地震道の延長線上では、大谷石の石垣が崩れたり、2階屋根の瓦がずれるなどの被害も出ていた。

●堤では、田んぼに近い低地の家はほとんど倒れた。斜面に近い高い所は倒れなかった。倒れなかった家も修理してやっと住めるものが多く、当時の税務署への申告は、ほとんどが全半壊であった。

●堤では、地割れは1回開くと元に戻らず、そのまま開き放しであった。

No6の発行趣旨

「自らの命は自ら守る」ため、何をどう考え、備えていくか? No6では、考えるネタとして、関東大震災の被害状況を体験された人の声を拾ってみました。さらに、想定される巨大地震に触れてみました。

★ 本紙に関する
連絡・問い合わせ先 ★

坂上 (B-24-20)
Tel/Fax 53-1351
y.sakaga@jcom.home.ne.jp

地震、その時の体感

- 小出地区で共通して語られていることは、
 - ①屋内・屋外を問わず、立っていることや普通に歩くことはできなかった。
 - ②最初に南もしくは南西方向からの大きな音とともに木々や稲などがざわめいた。
 - ③縦揺れと横揺れがほぼ同時に来た。(最初は揺れが数秒間続いたと語る人もいた)

●当時 37 歳で堤に住み、学校の教師をしていた男性は、勤務していた学校の生徒たちと藤沢の大庭神社で参拝中であった。雨が止んだ後非常に暑くなり、湿った風が吹いてきた。最初は「ドスン」と上下方向のゆれが 5~6 秒続き、その後左右に揺れて立っていることができず、生徒たちも皆転がされていた。地面からは地鳴りが聞こえていたそうです。

●揺れの間は大人も立っていられず這いつくばったが、体重が軽いためか子供は身体を固定することがさらに難しかったようである。

●当時 12 歳の男性は「体がゴム毬のように跳ねて叩きつけられた」と述べており、体の自由がきかなかったという証言が屋内・屋外に共通にしてみられる。

●当時 13 歳の男性は同級生と魚取りに行こうとして「北向地蔵のところまでいったが道標(三寸角柱)につかまって、転がるのを防ぐのが精いっぱい」であり、そばにいた中年の婦人がコロコロ転がって行ったり、来たりするのを見た。

●当時 7 歳の男性は「大きな揺れのためお寺の土手にあった大樹(イチョウの木)の枝が下の田んぼに触れる状態」だった。と見ていた。

●当時 8 歳の男性は「犬が立っていられず、腹這いになっていた」のを見ていた。

●自宅の座敷にいた当時 14 歳の女性は「自然に廊下まで出されてしまって、それから庭の植木場に放り出されて」しまった。

●当時 8 歳だった男性は「地割れは相当大きく、自分は逃げる途中その中に落ちた。落ちちゃったと叫びながら夢中で飛び出した」と証言している。

●当時 14 歳の男性は「お爺さんと一緒に庭をコロコロ転がった」。

負傷・死者の状況

●旧小出村では、死者 4 名、負傷者はどのくらいか分からない。

●人的被害については、転がったり何かにつかって、負傷した人が出た程度であった。

火災の発生

●建物や山林などの火災に関しては、昼食時であったが、火災が発生したという証言はなかった。

(この地に住む人達は、農家が多く、12 時前に昼食を済ませており、昼寝をしていた人も多く、火種が少なかったためと言われている)

近助(近所の助け合い)・共助

●隣組などの組織がしっかりしていて、近隣の住民たちが食糧を分け合いながら、皆で助け合って困難を乗り越えようとしていた様子があった。

●小出地区では、食料や飲料水に困らなかったところがほとんどであったが、証言者の多くは、復旧復興は隣近所や地域の人たちの助けが一番大事だったと語っている。

学校建物の倒壊

●校舎が老朽化していた小出小学校は新しい教室を竣工したばかりであったが倒壊してしまい、その後片付けに大野村の青年団 20~30 人が弁当持参・無報酬で奉仕していたことを、当時 11 歳の男性と 8 歳の女性が記憶している。

●始業式後下校した子供たちは様々な場所で遭遇し被害にあっているが、ほとんどすべての学校建物が倒壊したことを考えると、もし学校に子供たちがいた時間に地震が発生していたならば、大惨事になっていたと思われる。

小出川

●当時 11 歳だった男性は横ゆれ縦ゆれの後、小出川が 40cm 位増水したのと、熊澤醸造の作業所がばたばた倒れていくのを見た。

●当時 12 歳だった男性は小出川の中で地震の揺れに遭遇している。「川の中で魚を取っていたらドスンと大きな音がして体が上下左右に揺れ、ひっくり返ってしまった。そうしているうちに堰や土手が崩れ、水が流れ込み、揺れが激しく起き上がれずおぼれそうになった。」

津波

●由比ヶ浜で 9.0m、江ノ島で 7.1m、茅ヶ崎海岸では明快な数値が出ていない。相模川では津波が遡上し、湿地帯地域の地面からは水が噴き出した。

茅ヶ崎駅周辺

- 茅ヶ崎駅北口付近の家屋はほとんど倒れた。
- 銀座通りの釜成屋本店とその反対側の指旗2階建てがそれぞれ前（道路上）へ倒れた。道路は3間ぐらいだったので、今なら通れない。
- 伊藤醤油店（カギサン）本宅と倉が全壊した。
- 北口駅前には地割れはひどく歩ける状態ではなかった。
- 茅ヶ崎駅北口一帯は国道一号線まで全部つぶされ、約3尺(90cm)ぐらい一面に地下水がでて泥水でひどかった。

馬入川鉄橋の崩落

- 馬入川鉄橋は全長650mにわたりめっちゃめっちゃに変状した。上下線あわせて橋脚54基のうち54期が倒壊、鉸桁も56連のうち47連が川へ墜落した。（「日本国有鉄道百年史」第9巻）

亀の甲羅のようになった国道

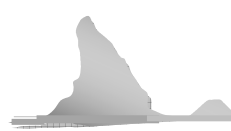
- 国道一号線あたりはあちこち松が倒れ、地が割れ、亀の甲羅のようであった。
- 小出川の下町屋橋の国道一号線の道路の地割れは甚だしく、東西に何十mというのが何本かでき、深さは目にみえぬ程で、割れ目は橋をかけねば渡れぬようであった。

転覆した貨物列車、飴のように曲がった線路

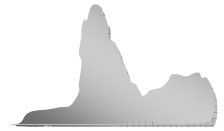
- 「日本国有鉄道百年史」第8巻によれば、茅ヶ崎駅構内では駅施設の被害に加え、貨物列車の機関車33両が脱線または転覆したとされる。
- 鉄道の線路は飴の如く曲がり、電柱はあちらこちらへと倒れたり、傾いたりして、架線はめっちゃめっちゃであった。
- 東海道本線の土手が平になり、線路は波を打って、宙に浮いていた。

地盤隆起

- 茅ヶ崎の町屋では大きな柱が田んぼの中から3～4本出ていた。この柱は地震による地盤隆起の結果下町屋橋わきの水田から現れた。旧相模川橋脚9本の一部であったと考えられる。
- 柳島地区全体としては隆起し、被害は少なかった。（烏帽子岩は隆起した）



烏帽子岩（震災前）



烏帽子岩（震災後）

関東大震災（かんとうだいしんさい）

関東大震災は、1923年（大正12年）9月1日11時58分32秒（日本時間、以下同様）、神奈川県相模湾北西沖80km（北緯35.1度、東経139.5度）を震源として発生したマグニチュード7.9の大正関東地震による地震災害である。

「関東大震災 INT」から部分抽出

「1923年 関東地震の被害集計（諸井・武村(2004)より引用）」

地域	住宅全壊	焼失	火災	死者・行方不明者数
神奈川県	125,577	35,412	25,201	32,838
東京府	205,580	176,505	66,521	70,387
他8県	41,502	436	59	2,160
合計	372,659	212,353	91,781	105,385

3.11の東日本大震災の2012年6月13日現在、警察庁がまとめたところによると、一連の余震での死者も含め、死者15,861人、行方不明者2,939人となっている。合計18,800人。

他8件とは、

千葉県・埼玉県・山梨県・静岡県・茨城県・長野県・栃木県・群馬県

関東大震災は今の東京に発生した地震と思われていますが、震源地は神奈川県相模湾です。

被害は東京府（今の東京都）の方が多く出た。昼食の用意で火を使っていたことで火災が発

生した。多くの方が家具を大八車で持ち出し道路が渋滞し、その家具にも火が付き、その火災に煽られて多くの方が亡くなったといわれています。

以下は、九都県市合同防災訓練（平成24年第33回）部会、
もしものときの災害マニュアル「災害から身を守る知恵袋」から引用

「減災」に取り組みましょう！

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、東北地方を中心に未曾有の被害をもたらしました。わたしたちが住んでいる首都地域でも「首都直下地震」などの大地震の発生が懸念されています。

日頃から備蓄などの備えや防災訓練に参加するなど、大地震から自分や家族を守るために「減災」に取り組みましょう。

（減災とは、

- 1, 自宅や職場での備え（備蓄・家具の転倒防止）
- 2, 正しい知識
- 3, 防災訓練への参加

私たちが住んでいる首都地域について

私たちが住んでいる首都地域は、

「首都直下地震」及び「東海地震」などの発生が懸念されており、大地震が発生した際の被害は、甚大なものとなることが予想されます。

九都県市では、予想される大地震や阪神・淡路大震災に見られる都市直下型地震の教訓を踏まえて、昭和55年から合同で防災訓練を実施してきている。

（九都県市とは、埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・横浜市・川崎市・千葉市・さいたま市・相模原市）

平成23年には、未曾有の大災害となった東日本大震災を経験したことから、九都県市では、被災地・被災者対応や救援物資の輸送などの、より実践的な訓練を実施し、九都県市相互の連携協力体制の充実・強化を図るとともに、住民一人ひとりの防災知識や減災への備えの向上を目指しています。

「首都直下地震」とは、

東京湾北部地震(M7.3)多摩直下地震(M7.3)など、首都直下で発生する地震の総称です。

特に東京湾北部地震7と揺れが強く、広域に及ぶことから、首都圏に大きな被害をもたらすと想定されています。

首都直下地震は、100～200年後に発生するといわれている関東大震災の再来までの間に、数回発生するといわれています。

「東海地震」とは

駿河湾沖から静岡県の内부를震源域とするマグニチュード8クラスの巨大地震を「東海地震」といいます。この地域は150年以上大きな地震が起きていないため、地震を起こすエネルギーが蓄積されて、大規模地震の発生が懸念されています。

東海地域には、地震に対する観測機器が重点的に設置され、常時観測システムがとられています。

また、東海地震の前兆現象の可能性が高まった場合には、「東海地震注意情報」が発表されることとなります。この注意情報が発表された場合、国、地震防災対策強化地域はもとより、その近隣の地域においても、住民への広報、医療救護の準備、児童・生徒の帰宅等の安全確保など、必要な準備行動を実施することとなります。

地震防災について

日本に住む限り地震との共生は避けられない。そのためには、家族の協力を核として、地域や学校との連携が欠かせない。自分の住む場所の自然環境を理解すること、また歴史をさかのぼって過去の災害知ること重要である。一言でいえば、今住んでいる地域にしっかりと根を張ることが不可欠だということである。これは子供たちのための故郷づくりにも通じていると思う。ここまで来るともう地震防災のためというより、我々の生活を豊かにする活動である。地震防災といえば面倒な気もするが、多少高い視点からこの問題を捉えてみてはどうだろうか。きっと良い結果につながると思う。

（「地震と防災」武村正行著）から引用）

教訓

国や自治体だけに頼る防災には限度がある。自らの安全は自ら守る自覚を持つことが防災の基本。

日本政府の新防災基本計画より
（1995, 7, 18 発表）

（情報元・参考文献）●茅ヶ崎は茅ヶ崎市史編集委員会編「茅ヶ崎市史ブックレット⑭」ちがさきの「関東大震災 市民の記憶」●「地震と防災」武村正行著 中央公論新社刊 ●九都県市合同防災訓練（平成24年第33回）部会、もしものときの災害マニュアル「災害から身を守る知恵袋」
<http://www.9tokensi-bousai.jp/kunren/> ●天災人災格言集 平井敬也著 興山舎